

あなたのためだけの一冊の本

大村伸一

半年ほど前から、読んでいる本はある出版社の本ばかりになっていた。その出版社の名前は仮に「A 出版社」と呼ぶことにしよう。本当の名前と連想することの何もない名前にしている。

A 出版社について調べてみると「一度ここの本を読むと、他のところの本は読む気がしなくなる」という評判をよく見かける。それではまるで麻薬か何かのようだが、実際、読まずに一月もするとイライラして他のことが手につかなくなるのだから、そういう効果は確かにあるのだろう。

A 出版社の本はうまくできていて、他の人間の買った本は、それを借りても読むことができない。普通の紙に普通に印刷されたとしか見えない文字は、知っているような気がしてもいざ読もうとするとなんの文字なのか分からなくなり、一文字も先に進めないことになる。特殊なインクを使い新しい印刷技術を開発したのだと出版社は公表しているが、実際にその本を読むまでそんなことが可能だとは思ひもしなかった。

真相はというと、どの本もその本の特定の読者のためだけに設計された特別な言語で印刷されているということらしい。本の部数だけ言語を作っているというあたりが可能に思えずどうも信用できないのだが、非常に高速のコンピューターを使えば、意外と単純なアルゴリズムで言語は作れるのだと出版社の社長が真剣な顔で説明しているのをいつだったかテレビで見た。

一冊に一つの言語など出版社の方はそれでいいとしても、読者にはこの他難しいことになるはずだ。つまり、もしそうなら、読者は一冊の本を読むために毎回、新たに一つ言語を覚えなくてはならないということになり、それほどの労力をかけて読みたい本などそうそうあるわけがない。しかし、実際に A 出版社の本を読んでみればわかるが、新しい言語といってもすべての本が手におえないくらい未知の言語で書かれているわけではない。すこしずつ違う一連の言語があって、読もうとする本ごとにそれを順番に使うのだという。最初はすこし読みにくいとか、なんだか妙な文章だというくらいの抵抗はあるが、それだけのことで最後まで読めてしまう。新しい本を読むたびにその違和感は消えないが、読書を続けられないという程ではない。しかしやがて十冊も読むと、その本の言語はもはや我々の言語とは一切似たと

ころのないものになっているのに、それまでと同じ程度の違和感でさほど抵抗もなく読めてしまう。このように、それぞれの読者が読書体験を重ねることで彼らだけにしか読めない言語を身につけてゆくというビジネスモデルが、A 出版社の成功の秘密だった。

それだけではない。新しい本を読むたびに、その言語の違いに応じていくらかの違和感とそれに伴い心理的な抵抗を覚えるわけだが、その「抵抗」こそが「麻薬」のように読者の心をつかんでしまうという効果がある。出版社によって巧妙に設計された「抵抗」の配列に魅入られ、人々は次々と A 出版社の本を買い求めるという仕組みにもなっている。

最初の本は多少の違和感はあるけれども読むことができる。しかし、十冊ほど読んでから、最初に読んだ本を改めて読み返すと、最初に読んだとき自分がどれほどその意味を理解していなかったのかが分かるだろう。そもそも最初の一冊は、我々の言語に非常によく似た文字や語彙を使っていてそれなりに解釈できるから容易に誤解してしまう。実際にそこに書かれている内容は、たいてい最初の解釈とはまったく関係のない話なのだ。たとえば、私の最初の本は、最初に読んだときにはこのような内容であった。

表題 実験器具と楽器の大いなる抗争

とある高校の化学の実験中、実験器具が「意識」を持つてしまう。実験器具は「実験」という神秘的な儀式を通じて宇宙の真理に近づきたいと願う。一方、同じ頃、音楽室ではピアノをはじめとしてトライアングルからマリンバ、フルートを含む管楽器や打楽器たちまでもが「意識」に目覚め、「美と幾何学」による世界の再構築を熱望する。楽器は科学的真理を否定し、実験器具は演奏によって生まれる美というものを否定し、両者は放課後の校舎裏で戦闘を始める。

校舎裏の大決戦の後で、ほとんどの楽器や器具が焼却炉で燃やされた後で、この戦いが誰かによって仕組まれたものだという校内放送が始まり、それは真夜中まで続く。

というところで第一話は終わる。

その後、十冊の本を読み、自分だけの言語に深い理解が得られたあと、その本を二度目に読んだときにはこのような内容であった。

表題 ふらすこ夫人の数奇なる人生

耳狩しわた氏は軍に太い人脈を持ち、戦争が始まって以来巨万の富を得た。彼の最愛の妻であるふらすこ夫人は舞踏会で出会った Q 間大佐と恋に落ち愛人となる。Q 間大佐はふらすこ夫人を自分だけのものにしたいと願い、軍の人事に手を回して耳狩氏を徴兵し激戦地へ向かわせようとする。一方、耳狩氏は夫人の不貞を偶然から知り、軍上層部の人脈を使い Q 間

大佐を激戦地へとむかわせようとする。ところが、戦争の混乱の中で、その二つの命令はふらすこ夫人を激戦地へ招聘する命令に変わってしまう。軍の命令は絶対であるため、二つの命令によって、ふらすこ夫人は二人の異なる男となり、夫も大佐も知らないうちに戦場へと向かう。

戦地では違う部隊に配属された二人のふらすこ夫人だが、命令系統の混乱により味方同士でありながらお互いに戦うことになる。その戦いで傷ついた二人のふらすこ夫人はお互いを支え合いながら、森の中の屋敷に迷い込む。その屋敷は古来からバンパイアの城として知られており、長い夜の間にどちらかの夫人はバンパイアになってしまう。

決戦は終わり、二人のうちの一人のふらすこ夫人は軍の英雄と祭り上げられ新政府国家の代表者に選ばれる。そして、その祝いの席に宇宙より使者が訪れ、夫人が実は女であることを暴露する。真相の暴露によって人類の結末に亀裂が生まれ、その時を狙って宇宙人の巨大宇宙船が人類を襲い始める。世界の滅亡が迫るとき、ふたりのふらすこ夫人は人類最後の都市で再会を果たす。

というところで、第一話は終わる。

出版社の方針により、それぞれの言語は他の言語へは正確な翻訳など不可能になるように作られているので、このような要約が、いかなる意味でも元の本の内容を伝えるものでないどころか、おそらく元の話とは似ても似つかないものになっているだろう。それでも少なくとも、読み直すたびにどれほど違う内容の話になるのかは伺い得るだろう。

さらに二十冊の本を読んだ後、この最初の本を読み直すとそれはこういう話であった。

題名 調理の時間

ガンに冒され余命三ヶ月を宣告された男が、生きるためにやむなく改造を受け調理器具になる。まさに料理が絶滅しようという時に調理器具となった彼は、とある伝説の料理を調理するために使われ、料理の世界に希望を残して自らは死ぬ。そして生まれ変わるとそこは球の世界だった。知性を持つ存在はすべて球で、球の間の幾何学的関係がすべてを支配している。やがて、他の球と球面を交差させその図形を熱心に記録する球が登場する。その球がすべての球を官能の喜びと共にひとつにしていまおうとするとき、もう一つの球が現れる。この球は奇妙なことに紫色に光り、世界の全ての球が中心を共有し並行な球面を持ち、球面が決して交わらないように生きる道を説く。二つの球の陰湿な批判と中傷が延々と続く。

共通するテーマやストーリーはもう全く見出せない。同じであるということは違うものだという事なのだろうか。それでも、私は同じ本を読んでいる。

いく度も読み返しその度に異なる姿を見せてくれた本によって、私は気づいてしまった。同じ本でありながらこのように繰り返し違う内容を読ませてくれるということは、本がすでに一つの生物になっているという証拠だ。そんなことが可能なのは生物しかいないからだ。だとすればやがて、この本が他ならない私を読む日が来るだろう。私はこの本のように、読まれるたびに違うストーリーを与えられるのだろうか。私は読まれながら生き続けることができるだろうか。

ここまでが、さらに百冊を読んだ後に最初の本を読み直した内容の要約である。